

## RUBeC 演習を終えて

市川 裕太

Yuta ICHIKAWA

機械システム工学専攻修士課程 1年

### 1. はじめに

私は、8月15日～8月31日の2週間の間開講された、RUBeC 演習に参加しました。開講場所はアメリカ合衆国カリフォルニア州にある「Jodo Shinsyu Center」の中の龍谷大学の教育・研究の海外拠点である「Ryukoku University Berkeley Center (RUBeC/ルーベック)」です。この演習は英語のテクニカルライティングとプレゼンテーションの学習、滞在した場所近郊での校外学習などを行うことを目的としたプログラムです。また、滞在期間はホームステイをしながら RUBeC へ通いました。

### 2. 演習に参加した目的

私は、義務教育期間から今まで英語を勉強する機会はありませんでしたが、意思疎通、会話をするにあたって使用しなければならない機会はありませんでした。このため、英語を日常生活で使用しなければならない米国へ赴き、現在の私はどの程度海外の方と意思疎通、会話できるのか、また、現在の私に足りないもの（英語を使用するにあたって）は何かを発見することを目的にこの留学プログラムに参加しました。

### 3. 授業内容

#### 3.1 テクニカルライティング

水曜日を除く平日の午前中（9時～11時30分）にテクニカルライティングの講義がありました。講義の目的は RUBeC 演習前に作成した自身の研究の英訳した要旨を校正するためのものです。だが、講義内容は、今後英語での論文作成時に非常に重要な点について押えてあるものでした。

その中でも特に強調されて指導されたのが、冠詞

の使い方です。まず、冠詞は日本語には無い考え方のため、日本人にとって考えにくいものであります。講義では“a”“an”“the”の使い方を、例文を用いて説明されました。“a”“an”は文章中に初めて示した名詞に対し使用し、“the”は“a”“an”で示した後などの既に定義された名詞に対し使用します。このような考え方やイメージを習得するには、日本で勉強しているだけではわからなかった事であると感じました。

要旨の校正は主に宿題として行いました。校正しなければならない箇所には校正記号を用いて間違いを指摘されました。講義中でもこの記号について触れていましたが、今回の演習で初めて扱ったため、その記号がどのような意味のあるものであるか調べる必要がありました。また、担当された先生は工学の分野に関して知識のある方ではなかったため、講義中に、校正箇所の文章がどのような意味があるのか説明を求められることがありました。自らの考えを英語で即座に返答することはとても難しいことでありますが、ライティングに必要な勉強だけでなく、自らの考えを言葉にするよい機会を与えられた講義でもありました。

#### 3.2 プレゼンテーション

昼休憩を挟み、午後（13時30分～15時）にプレゼンテーションの講義がありました。この講義では RUBeC 演習前に作成した自身の研究の英訳したスライドの修正、英語の発音の仕方、どのようにふるまえば魅力的なプレゼンテーションを行うことができるか、などの術を学びました。

プレゼンテーションで用いるスライドはシンプルで伝えたい事柄が明確に見えるものが良いとのこと。で“Yahoo”と“Google”の検索エンジンを例に説明していました。授業では各自のスライドの良いものと悪いものを選択し、クラス全体でその両スライドについて意見を出し合うということを行ったりもしました。

発音では“R”“L”の発音についてよく注意を受

けていました。“R”は舌をのどの奥に引くような状態にして発音し，“L”は前歯の裏に舌をつけるような状態で発音します。この二つのどちらかが含まれている単語は意識していてもなかなかうまく発音しにくいものでした。

魅力的なプレゼンテーションを行うにはジェスチャーや目配せが重要であるようです。プレゼンテーションではただ前にでて話すだけではなく、聴者の興味を引かせ、聴者一人一人と接しているような状態を作り出すことにポイントがありました。このような点は英語での場だけでなく普段の日本語での発表の場でも重要なスキルではないかと感じました。

#### 4. 校外学習

滞在した二週間の各水曜日に校外学習として、最初の週に計測器大手メーカーの Keysight Technologies 社に工場見学へ、次週にカリフォルニア大学デービス校 (University of California, Davis) へ訪問しました。

Keysight Technologies 社は本社がカリフォルニア州サンタクララ市に位置し、世界 100 カ国以上での従業員数約 9500 人、収益は約 30 億円の計測器業界の最大手企業です。同社はオシロスコープ、スペクトラムアナライザなどの計測器だけに焦点を絞った製造を行い、半導体、IC チップなどすべての部品を外注せず、自社ですべて製造する特徴があります。これは同社の技術が社外へ流出することを防ぐために行うようです。また、これらの部品を自社製の高品質な計測器を用いて測定することより、良い品質のものだけを使用する工夫がされていました。

カリフォルニア大学デービス校は、現在存在する

学部が理学部、文学部、経済学部、工学部等の 7 学部あり、生徒数は学部生 約 25,000 名 大学院生 約 7,000 名、敷地面積約 20 km<sup>2</sup> のカリフォルニア州 デービス市に位置する学校です。敷地内では多くの緑に囲まれていて、学食の近くでは青々とした芝生が敷き詰められた場所があり、多くの生徒たちが昼食を取っている様子や遊んでいる様子を見ました。そこでは英語だけでなく、聞きなれない言語が飛び交っていたりしていたため、他国から招く留学生も多いのだと感じました。今回訪問した時期は夏休みと重なり、学校にいる生徒数は普段より少なかったようですが、研究棟を覗くと、研究を進めるために研究室に残る方は多いようでした。見学を終えてのデービス校の印象として学生が活発に、受動的ではなく能動的に行動する方が多いと感じ、見習わなければならないものだと思います。

#### 5. おわりに

この演習に参加するまで私にとって海外の国は日本とは全く別であるイメージを持っていましたが、今回の経験を通じて、日本とあまり大きく変わらないと感じました。確かに言語、食べ物など挙げていけば様々な違いを発見できると思いますが、人間が生活する以上根本にあるものは同じではないかと思いました。また、二週間という短い期間であったため、自然な流れの会話ができるほど上達しませんでした。相手から発した言葉に対する理解は完璧とは言えないが、大体のことは理解できるようになりました。今後英語を学習するにあたって、机に向かい勉強するのではなく、実際に会話をしてみるのが重要でないかと感じました。